

そもそも時間様相は系列化されるのだろうか？

マクタガートのパラドックスによせて

植村恒一郎（群馬県立女子大）

私の『時間の本性』（2002）では、マクタガートのパラドックスの概要を捉えることはできたが（p183-198）、批判的検討は不十分であった。ここでは、マクタガートの議論の前提に含意されているいくつかの事実を明るみに出して、検討してみたい。

A系列の複合述語には可能的現在が含まれているのではないか

「A系列に可能的現在が含まれるならば、B系列はそこから構成できるのではないか」という疑問がある。完全なB系列が構成できるかどうかはともかく、A系列の「移行」や複合時制述語という発想には、未来や過去を可能的現在とみることが含意されている。なぜなら、複合述語における「～から見れば at a moment of ～」は、その過去や未来のある時点をそのつどの可能的現在とみなして「そこから見れば」と仮定するからこそ、次々に高次の複合述語が作れるからだ。未来や過去は、それ自身が、可能的現在とみなされている。

だが、未来のある時を「そこが現在である時」とみなすことは、時間が経過して「今はその時点が現在になっている」ことだから、「動く今」がもう先取りされており、A系列の「移行」は複合述語に含意されているのではないか。だとすると「矛盾」はどうなるのか。

「動く今」を自由に飛び移ることはできない

「今」が「ここ」や「私」という指示語と違うのは、「今がいつであるのか」は我々の自由になることではない点である。「ここ」は、各人がそれぞれ自分のいる場所を指示している。我々は自由に空間上の位置を移動することができるから、私の言う「ここ」と、彼の言う「ここ」は、別の場所でありながら同じ「ここ」という語で指示してよい。「私」という指示語も、異なった各人を指示できる。しかし、「今」はそうではなく、「今がいつであるか」は、全世界に生きているすべての成員にとって共通の事実として強制されている。この事実と、複合述語の形成はどのような関係にあるのか。

「今」の自己表現的構造について

「今がいつであるか」は時刻を示すだけでなく、「～している今」「～が見える今」のように内容と一体である。「今」は一種の記号であるが、他のものを指示するのではなく、我々が外界と接触していること自体の「自己表現」であるという視点から時間様相を考える。